

# 1月の予定

- 6日 ビデオ&詩篇朗読&書き取り  
1月生まれの人に祝福のお祈り
- 13日 きっず・らんど
- 20日 ビデオ&詩篇朗読&書き取り
- 27日 お話&詩篇朗読&書き取り

## チャレンジ! 暗誦聖句

義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。

マタイの福音書5章10節



# ろばのこ



加古川福音キリスト教会日曜学校校部 発行  
牧師 楠橋 清隆・喜代子  
TEL 079-425-1406

## 教科書にでるクリスチャン偉人伝 『新島八重』

2013年大河ドラマ『八重の桜』のヒロイン、新島八重は1845年会津藩で代々砲術師範を務める山本家の三女として誕生しました。

幼少より男勝りで、兄の山本覺馬から射撃砲術を学んだ八重は、隣家の少年伊東悌次郎に砲術を指南するほどでした。1868年、戊辰戦争が勃発、鶴ヶ城にて籠城が始まると、八重は髪を切り戦死した弟の服を着てスペンサー銃と刀を持ち、果敢に戦いました。落城の際、白壁に刻んだ『明日の夜は何国の誰かながむらん なれし御城に残す月かげ』という和歌が、よく知られています。

1871年、兄覺馬の推薦により京都女紅場（現府立鴨沂高等学校）に勤めたころ、新島襄と知り合います。襄はアメリカの義母にあてた手紙で、八重を「ハンサム・ウーマン」＝生き方の美しい人、と紹介しています。二人は、1875年婚約、1876年1月2日八重が洗礼を受け、翌1月3日京都で日本人初のキリスト教式結婚式を行ないました。

結婚後、1877年同志社分校女紅場（現同志社女子大学）の認可にあたり、八重は力を尽くし、礼法の教員となります。

1890年神奈川県大磯で療養していた襄が、危篤に陥り、八重は昼夜を問わず献身的に看護しました。しかし1月23日、襄は八重の腕に抱かれながら「グッバイ、また会わん」と言い残して亡くなったそうです。わずか14年の結婚生活でしたが、襄にとっての八重は、生涯最良の伴侶でした。

襄の永眠後、八重は日本赤十字社員となり社会奉仕事業に献身する道を歩き始めました。日清・日露戦争に篤志看護婦として従軍し、若い看護婦たちを率いて、傷病兵を助け、戦死者の遺族や女性の自立のためのサポートにも携わりました。この功績によって、民間女性として初めて政府から叙勲を受けました。

八重は激動の時代の中、大切な「なにか」を守るため、戦い前進した女性でした。『幕末のジャンヌ・ダルク』とも称される逞しく、不屈の精神を持つ八重は、1932年急性胆のう炎のため、自宅で亡くなりました。享年86歳、波乱に満ちた人生でした。

## 編集後記

新島夫妻のエピソードを一つ。  
八重は洋風の帽子に、ヒールの高い靴、そして和服という服装を好んでいました。

ある時、同志社英学校の学生の、徳富猪一郎（後の蘇峰）が、「頭と足は西洋、胴は日本という鶴のような女がおるとは、けしからん！」と学生一同の前で、あからさまに八重を非難したのですが、八重は決して動じることはなく、自分のスタイルを貫きとおしたそうです。

また襄も、愛妻への無礼にかかわらず、蘇峰を疎外せず、かえって信念と独立心に富んだ学生として非常に丁寧に扱いました。

後にジャーナリストになった蘇峰は、襄の右腕となりました。また襄の臨終の際、かつての非礼を、八重に詫びたそうです。

襄と八重、人を恐れることのない生き方は、本当に恐れるべき方、創造主なる神を知っている者のゆるぎのない姿だと思っています。

また、自分に敵対する者をも、正しく評価し、その才能を育てた懐の大きさも、彼らがほんとうに真理を求める者であったことを表していると思います。

後年、八重の墓の墓碑銘を書いたのは、あの蘇峰でした。